



支え合う

教育長 津野庄一郎

じょうこうごう
上皇后美智子さまの激動の人生を支えたのは、子どもの頃に読んだ本の教えでした。その一つに新美南吉にいみなんきちの「でんでんむしのかなしみ」があります。美智子さまは、東日本大震災直後の被災地の子どもたちに知人を通して本を贈りました。その中の 1 冊が「でんでんむしのかなしみ」です。

「でんでんむしのかなしみ」は、自分の殻に悲しみがいっぱい詰まっていることに気づいたでんでんむしが、仲間に相談する中で「悲しみは誰にでもあるもの」と知り、自分の悲しみを受け入れて強く生きていこうとする物語です。

人生はいつも嬉しいこと楽しいことばかりではありません。時に心が沈んだり、涙が出たり、どうしていいかわからなくなることもあるかもしれません。この絵本に出てくるでんでんむしも、悲しい気持ちを抱えていました。でも、友達に話してみると、みんなもそれぞれ悲しい気持ちをもっていることを知り、悲しみは自分一人だけではないことに気づき、前向きに生きていくと決心します。このお話は、つらい時や悲しい時は一人でがまんしないでいいこと、誰かの力を借りることが大事だということ、そして、誰かの力になることもできるということを教えてくれます。

夏休みが終わり、2 学期の学校がスタートして、学級や人間関係など緊張したり、友達や授業のこと、部活動（地域クラブ活動）や進路のことなどで不安に感じたりする子どもたち、保護者の方もおいでかと思いますが、それは自然なことです。遠慮なく周りの信頼できる人に話してください。ぜひ、人の力を借りたり、誰かの力になってあげたりと、お互いに支え合いながら成長していったほしいと願います。